



とどろ  
この思い  
.....

あんた  
サメでしょ

## 白鳥もまた鳥である



最近、ある人へのメールで、「悪評もまた評である」というようなことを書いた。これは死刑判決を受けたソクラテスが言うところの「悪法もまた法である」をもじったものだ。

しかし冷静に考えてみると、この言葉は実際のところ何も言っていないのではないかという気がしてきた。「悪評」を別の言葉に置き換えてみるとよくわかる。

「白鳥もまた鳥である」

あたりまえじゃないか。

「カミキリムシもまた虫である」

こんなことを得意げに言ったところでなんになるんだ。

もちろんソクラテスが言いたかったのはそんなことではない。「悪法もまた法」は、「だから？」という疑問と、それに対する明確な答えがなければ完結しない問題であり、「悪法もまた法」というだけで何か内容のあることを述べたつもりになっては困るということなのだろう。

「『建築物用地下水の採取の規制に関する法律』もまた法である」

それがなんだというのか。

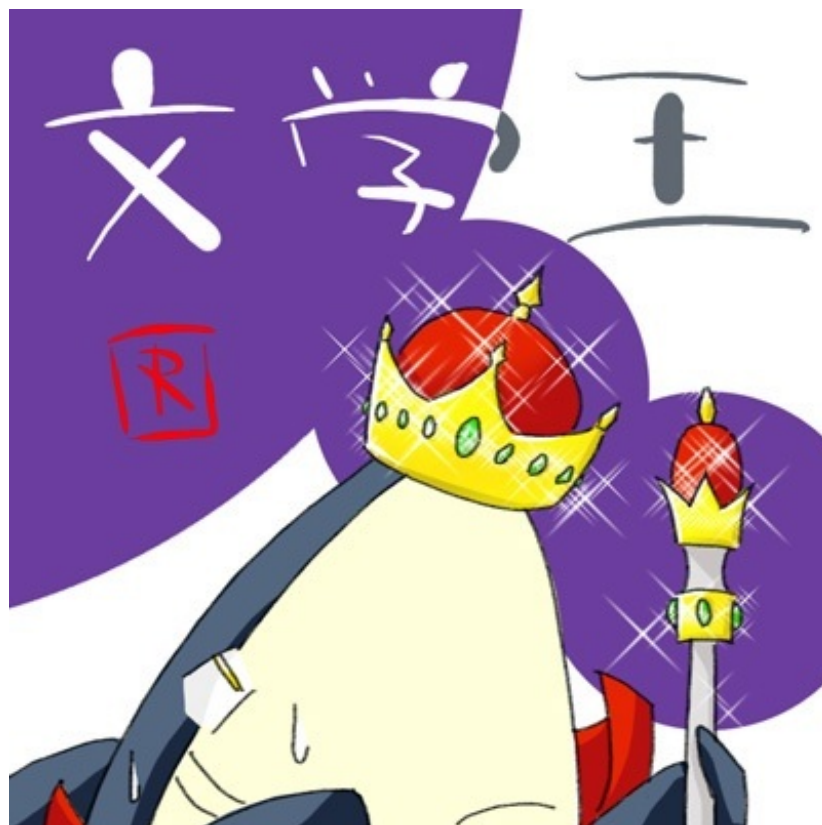
「○○もまた○○である」には、悪法に殉じることで自らを人類の永遠の教師として完成させたソクラテスの権威に寄りかかって、「立派なことを語ったつもり」にさせてしまう何かがある。軽々しく使うことには大変な危険がひそんでいと実感した次第だ。

一方でこういう場合もある。

「シマアジは鰻である。しかし魚の鰻ではなく鳥のシマアジもいる」

こうなるともうなにがなんだかわからない。

## 文学王



ただ単に「作家」と言った場合、著作家、とくに小説家を指す場合が多い。

[Wikipedia:作家](#)

なぜだろうか。詩人や画家だって作家である。映像作家とか造形作家という呼び方はある。なのに「小説作家」とは決して呼ばれない。そこに僕などは小説家の傲慢さを感じる。「俺様は作家様だぞ、なにか文句があるのか」的なナニカだ。しかも「作家」でも飽き足りない人がいることを我々は忘れてはならない。例えば小説家には「文豪」などという尊称もあるが、これは自分で名乗るとかなり馬鹿みたいということもあるし、そんなとき小説家はいこういうふうになってしまうのだ。

やらない、そういうこと、私は。もっと高等な文学者ですから。

[石原知事記者会見、平成20年12月12日](#)

「文学者」である。ついに学者である。いったい画家が画学者と名乗るだろうか。それでいくと雅楽家なんか雅楽学者になってしまうではないか。「が、がく……がくしゃ」だぞ。「何を震えてるんだみっともない」という話になると思うのだが、それはいいか。

とにかく「文学者」だ。小説家にはすさまじい上昇志向があるのだということをまざまざと思い知らされるセリフである。なにしろ政治家になってしまうくらいだしな。心中したり割腹したりするだけが小説家ではないのだ。そこが「文筆を生業とする小説家諸集団」（略して文壇）の豊穡さかもしれないが、やっぱり割腹はなあ。

ところでそれほどの上昇志向の持ち主が「学者」ごときで満足しているはずがないと思ひ至るのは普通だと思う。学者などといってもしよせん実体はただの教師である。そもそも「文学者」だと、どちらかといえば「批評家」に近いアカデミックな研究者と混同して紛らわしい感もあるし、そこで、こうなったら乗りかかった船、もっとよさげな名前を考えてやろうではないかとおせっかいにも思ったりしたのだ。

そうなるとやはり、

## 「文学大臣」

だろう。なにしろ「末は博士か大臣か」というではないか。つまり「親が子に望む二大職業」である。それでいくと安定性を求めて「文学公務員」というのもひとつの可能性として捨てがたいのだが、これだとやはり少しせせこましい感は否めないし、さらに「文学役人」になるともっとだめだ。どこの検閲者だという感じだ。

話がずれた。とにかく、近ごろ政治家の扱いも非常に軽くはなったとはいえ、やはり大臣は大臣、腐っても大臣である。政治家は落選すればただの人だが、じつは大臣は、ある一定の割合なら国会議員でなくてもなれるので無問題なのだ。「文学大臣」にはなかなか偉そうな響きがあるし、今はなき「文部大臣」にも似てるのでオススメだ☆

しかしもちろん大臣には「上」がいるわけで、誰かが文学大臣を名乗り出したら、

## 「文学王」

という呼称が出てくるのもまた必然であろう。「王」である。「文学王に、俺はなる！」というわけである。ONE PIECEのことはよく知らないのであまり具体的なことを書けないのが残念だ。ついでにいうと王を統べるものという意味で「文学皇帝」というのもありかもしれない。そしてこうなるともっと偉そうな呼び方が欲しくなるのが人の常である。だからきつこう名乗るものが出てくる。

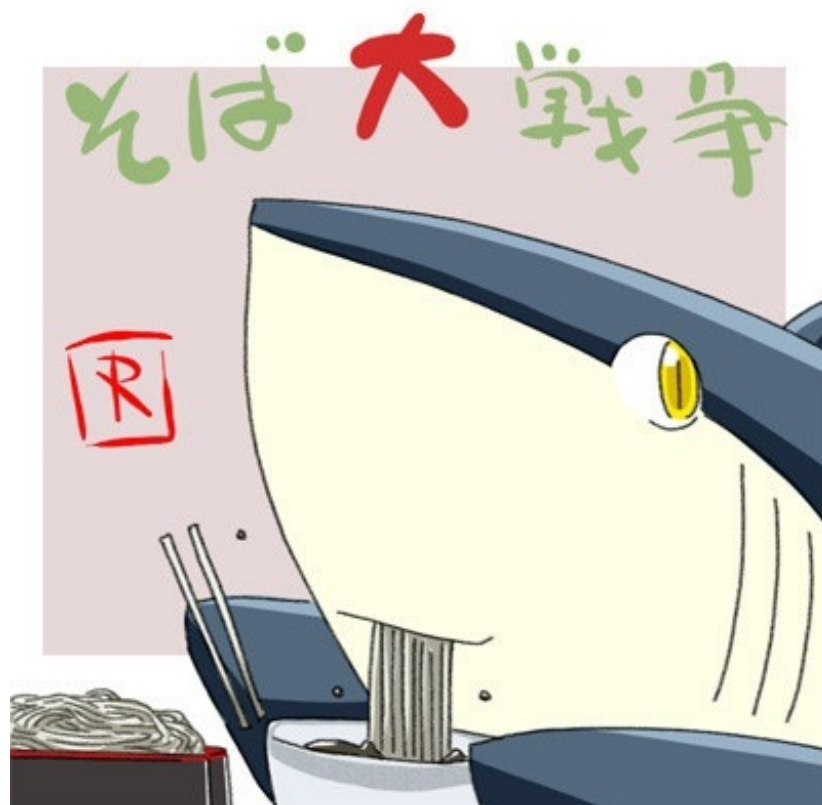
## 「文学神」

たちまち2ちゃん語になってしまったようにも思えるが気にしてはいけません。そこからおそら

くさらに上位の概念である「文学界王」「文学界王神」などと続くのであろうが、もうどうでもよくなってきたのでここで一方的に終わろうと思う。DRAGONBALL改も見てないし。

大宅壮一だったかが、「個人主義文化の純粋な体現である小説は、個人主義文化の最高潮であった十九世紀をもってすでに終わった」とどこかに書いていた、という話をどこかで読んだ、ような気がするのだが、であれば二十一世紀を生きる若者はもっと別の新しい道を探さねばならないわけである。文学にかまけている暇などないのだ。

## そば大戦争



そば通が言うには、噛まず、するっと飲み込むとのが粋な食べ方だとか。喉越しこそが蕎麦なのだ、と。

しかし、ある研究によれば、そばは噛んだほうが「そばポリフェノール」という栄養素をより効率的に摂取できるらしい。

そうなれば、「健康より喉越し」派と、「喉越しより健康」派が対立するのは必然であろう。

健康より喉越し派は言う。

「なーにが『そばポリフェノール』だ。早死にが怖くてそばが楽しめるかってんだ」

しかし、喉越しより健康派はこう切り返すだろう。

「あいつらは見栄を張ってるだけさ。喉越しなんて、健康のことを考えれば刹那的な快樂にすぎないじゃないか」

話は絶望的なまでに噛み合わない。

こうなると、そばで派閥争いである。例えば、ある会社では喉越し派閥が優勢だとしよう。創業

者である頑固な会長がそのトップにいる。一方、社長は健康派なのだが、その力は弱く、なんとか切り返しを図りたい。

昼休みは社員たちにとって試金石となる。うっかりそばでも注文しようなら大変だ。そばを食べようとすると、周りの視線が釘付けになる。「そばを噛んで食べようが、飲み込もうが、個人の問題じゃないか」などとしごくまっとうなことを言う人もいるだろうが、誰も聞き入れたりはない。それだけではなく、ある日突然左遷されていたりする。果てしない諍いである。

だが安心するがいい。そんな重苦しい空気は、ある日、突然に解決する。

なぜなら、喉越し派は健康に気を配らない人たちなので、ばたばたと倒れてしまうからだ。

健康派の勝利——社長たちは氣勢をあげるだろう。「これからは我々の天下だ！」と。

しかし、喜びは続かない。長く踏みにじられてきた心労と、突然の歓喜に体が参ってしまい、健康派もまた倒れてしまうのである。そばポリフェノールのような些末なことにこだわるような性格だと、こうなる。

そういうわけだから、けっきょく誰もいなくなるのである。過度なこだわりは身を滅ぼすのである。人生中庸が大事なのである。

僕はいったい何を書いてるんだろう。